

経営者への活きた言葉

日本のモノ作りの仕組みが変わる永守重信(日本電産社長)

1. 多くの日本企業は、中国など新興国の企業がどんどん安いものを出してくる時、「我々は高級品でいく」と考える。大企業ほどすぐにそう言う。
私が日本電産を創業した1973年、米国にはRCAという巨大電機メーカーがあったけど、十数年でつぶれた。誰にやられたかというとな日本の電機メーカーだ。
今で言えば、韓国や台湾、中国のメーカーにやられたようなものと言えるだろう。
2. どうしてやられたかと言うと、高級品に逃げて低価格OEM(相手先ブランドでの生産)にしたわけだ。今、日本の会社が中国の会社や台湾の会社にパソコンやほかのモノを作らせているが、それに似ている。高価格品市場だけで生きていけるというのは、技術的過信に基づいた発想で、とても危険だ。技術的過信は、企業と国の双方を危い方向に持っていく。
3. 震災からの復興過程では、安くいいモノを早く作るころから部品や部材を調達するように変わるだろう。これは不可避の潮流だ。自由競争に完全に身を置かないと、日本企業は世界の中でもう勝てない。在庫を持たないとか、ジャスト・イン・タイムとか言い続けてきたが、そういう効率の追求だけではダメだということが、今回の震災で分かったのではないか。
日本が強みにしてきたモノ作りの仕組みが変わらざるを得なくなると思う。

(参考:「日経ビジネス」2011年5月30日号)

経営者のための理念・哲学

いつも真剣勝負

1. 中川一政氏は明治26年、東京本郷に生まれた。氏がはじめて絵を描いたのは21歳の時。そこから氏の求道人生が始まる。「志」は「士」と「心」ではなく、「之」と「心」でできた文字、というのが中川氏の持論だった。
「心」が「之」(行く)の意で、心が方向を持つことだという。
2. 中川氏95歳の誕生日のスピーチがある。「長生きしようと努力したわけではないが、気がついたら95になっていた。芭蕉がその最期の時に、弟子にどれが辞世の句かと聞かれ、自分にとって一句一句辞世でなかった句はない、といっているが、私はこれからの一日、一日をそういうふうに送りたいと思う。「稽古をしてはならぬ。いつも真剣勝負をしなければならぬ」。この言葉を自戒としたのである。

(参考:「致知」:2011年9月号)